

司馬遼太郎
全講演
[5]

1992-1995

朝日文庫

し ばりようた ろうぜん こうえん
司馬遼太郎全講演 [5]
1992-1995

朝日文庫

2004年1月30日 第1刷発行

著 者 司馬遼太郎

発 行 者 柴野次郎

発 行 所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

電話 03 (3545) 0131 (代表)

編集＝書籍編集部 販売＝出版販売部

振替 00190-0-155414

印刷製本 凸版印刷株式会社

©Midori Fukuda 2000

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-264323-4

司馬澹太郎全講演 [5]

江苏工业学院图书馆

1992-1995

司馬澹太郎
藏書章

朝日文庫

本書は朝日新聞社より刊行された『司馬遼太郎
全講演 第3巻』（二〇〇〇年九月刊）中、一九
九二年（一九九五年の講演をまとめたものです。

目次

一九九二年

播磨と黒田官兵衛 11

九州の東京志向の原形 25

草原からのメッセージ 39

建築について 61

一九九三年

秀吉を育てた近江人脈 89

防衛と日本史 103

『花神』から『胡蝶の夢』へ 140

日本の朱子学と楠木正成 156

司馬さんの控え室① 司馬さんの「論語」のススメ

173

一九九四年

『坂の上の雲』秘話 177

会津の悲運 209

竜馬とエネルギー 225

正岡子規のリアリズム 239

モンゴルとういろう 255

清正と大阪の名市長 269

司馬さんの控え室② 司馬デスクと三浦浩さん 285

ノモンハン事件に見た日本陸軍の落日 287

一九九五年

臓器移植と宗教 315

司馬さんの控え室③ 写真のなかの司馬さん 332

少数民族の誇り 334

解説 近代の『風土記』を書いた人——山崎正和

351

司馬遼太郎全講演

[5]

1992-1995

一九九二年（平成四）

一九九二年

脳死臨調が脳死者からの臓器移植を認める答申（一月）

国連カンボジア暫定行政機構（UNTAC）が発足（三月）

宮城県で日本初の顕微授精ベビー誕生（四月）

国連平和維持活動（PKO）協力法案が可決される（六月）

中国と韓国が国交を樹立（八月）

米国大統領選でクリントン候補が勝利（十一月）

韓国大統領選で金泳三候補が勝利、文民大統領が誕生（十二月）

自民党竹下派が分裂、羽田派が旗上げ（十二月）

【司馬遼太郎六九歳】

アメリカ・ニューヨークに取材旅行（二月―三月）

●主な著書

『世界のなかの日本―十六世紀まで遡って見る―』（ドナルド・キーン氏との対談、四月）

『草原の記』（六月）

『時代の風音』（堀田善衛、宮崎駿氏との鼎談、十一月）

播磨と黒田官兵衛

私の家系はつまらない家系でして、父方も母方も近畿地方以外へは出たことがないようです。

父方の祖父はもともと姫路の人でした。戦国時代の姫路に英賀城あがというちっぽけなお城があつて、織田信長に反旗をひるがえしていました。やがて落城し、こもっていた侍たちも城を出た。私の先祖はその一人だったようです。英賀の向こうに、広ひろ(現・姫路市広畑)というところがあつて、父方の家系は江戸時代以来、ずっと住んでいた。侍はやめて百姓をしていたようです。

私はそろそろ、六十七、八歳になるんですが、このあいだ中学の仲間たちが集まりました。われわれは何年に七十歳になるのかという他愛もない話になり、

「紀元二〇〇〇年に七十だろ」

と私が言いますとですね、仲間のひとりが言いました。

「おまえは昔から苦勞してきたな」

慰めてくれたんです。昔から算術ができないんですね。(正解は一九九三年)

ところが、祖父は非常に算術のできる人でした。そして江戸時代の姫路はおもしろいところでした、和算がたいへん盛んな土地だったんです。和算というのは日本独自の数学でして、たいへん高度なものでした。微分積分まであったそうですね。

私の祖父はその和算が得意でした。

遺伝しないものです。京都に三条大橋がありますが、やや湾曲しています。それを利用して円の直径を出せといった問題を勝手に自分で作り、仲間にも答えさせる。和算の他流試合であります。そのうちに作った本人も答えを出し、それが正解だったものだから、広の天満宮(広畑天満宮)に「算額」というものを掲げて喜んでいた。

そういう人は、えてしてバクチ好きであります。

姫路は昔から海上の交通がいい。飾磨しきまの港に出て、やってきた千石船に乗れば、すぐ大坂です。姫路に住んでいて、その日の道頓堀の芝居を見ることができると言っています。この話をいまの皇太子さまにしたことがあります。それは珍しい話です」と言ってメモをとっておられた。イギリスに留学され、交通論を勉強されたからご興味があったのでしょうね。

道頓堀の芝居も見られるし、姫路にいなながら堂島の米相場に参加できたそうです。祖父は三度破産しては復活し、四度目にはとうとう家屋敷を売って大坂に出ざるを得なくなつたのです。

その後、祖父は大坂で小さな成功をおさめ、広の天満宮に寄付して石垣に名前を書いてもらった。その話を聞いていたので、十数年前に姫路を訪ねたときに、広の天満宮にお参りに行ったことがあります。夜の九時すぎで境内は灯ひとつない。

「あきらめましょう」

と私は言つたんですが、同行してくれた人が懐中電灯を持ち出してきた。

草むらに入り込んで照らし始め、最初に浮かび上がった石垣に、私の祖父の名前がありました。だいたい私は不思議な話は嫌いなほうなんですが、このときはさすがに心に残りました。心のなかで、自分は播州人ばんしゅうだと思ふようになったのはこのころからでしょう。

官兵衛の頭の働きは商人のようでした

今日は播磨はりまという土地を考えながら、黒田官兵衛という人の話をいたします。

黒田官兵衛という人は、日本の歴史のなかでも非常に魅力的な人ですね。戦争は上手

でしたが、べつに個人的な武勇があったわけではない。馬に乗るのも苦手な人で、屈強な若者に輿こしを担がせ、輿に乗って指揮をしていた。自分自身の欲望はほとんどない人でした。日本の政治地図を変えたいと、どうもそれだけが望みだったようです。頭のいい人で、私利私欲がないから透明なプランができた。とにかく不思議な人でした。

黒田官兵衛の祖父は滋賀県に生まれました。北のほうに黒田という小さな村があり、私も訪ねたことがあります。

神社がありまして、黒田神社と呼ばれていました。黒田家もここが先祖の出たところだと思つて大切にしているようでした。

黒田村を出た黒田家は、岡山県の福岡に出ていきます。福岡の近くに長船おさふねというところがあります。福岡も長船も刀鍛冶の盛んなところでした。

当時、明との貿易が盛んでした。

輸出品目で人気があったのは日本刀ですから、福岡や長船の刀鍛冶は大忙しでした。かなり粗製乱造したようですが、それでも景気は良かった。当時では先進の工業地帯だったんですね。

現金が落ちている街に官兵衛のおじいさんが流れていったのは、当然でしょう。のちに黒田家は筑前の大大名となりますが、その首邑しゅゆうに福岡という名前をつけます。もともと九州に福岡という地名があったわけではなく、昔を忘れないようにと、岡山の小さな

村の名前をつけたのです。

官兵衛の祖父はよく働きました。帳簿つけなどをしていたようです。そのうちに、隣の播州姫路に来ました。来てすぐに広嶺山に登り、その古風なお宮の宮司さんに会っています。

室町時代の神社というのは、なかなか、たちゆかないものでした。領地はどこも侍どもに横領されてしまっています。伊勢神宮でさえそうでした。伊勢神宮はもともと皇室の神社なんだから、お参りするところではなかった。

ところが室町時代から伊勢参りが始まります。これは伊勢神宮が商売を始めたからです。神主ともセールスマンともつかぬ「太夫」(御師^{おんし})をたくさんかかえ、全国を回りました。電器会社や新聞社の販売店のようなもので、お守りや暦を配って回ります。彼らが伊勢神宮の御利益を宣伝して、やがてお伊勢参りが流行します。

広嶺山のお宮も似たようなことをしていました。そこへ黒田官兵衛の祖父がやってきます。姫路に落ち着こうとしている祖父に、御師がアドバイスしています。

「あなたの家に何か家伝の薬のようなものがありますか」

「家伝の目薬があります」

「それを私どもの太夫がお札を配るときにつけて配ればいい」

目薬はハマグリに入っているペースト状のもので、効き目はよく知りません。しかし、